

# 第 16 回ソウル国際ブックフェア

名 称	16th Seoul International Book Fair
会 期	2010 年 5 月 12 日 (水) ~ 16 日 (日)
入場時間	12 日 (水) 9:00-18:00 13・14 日 (木・金) 10:00-18:00 15 日 (土) 10:00-20:00 16 日 (日) 10:00-17:00 (来場者多数のため急遽 18:00 まで延長)
会 場	COEX(韓国総合展示場)
展示面積	14,733㎡
主 催	ソウル国際ブックフェア実行委員会
テーマ国	フランス
出展数	596 社 (国内: 361、海外: 194、ブックアート / 電子出版: 41) (昨年 885 社)
参加国	23 カ国 (昨年 19 カ国) フランス、サウジアラビア、中国、台湾、日本、フィリピン、シンガポール、ベトナム、アラブ首長国連邦のシャルジャ、イラン、アメリカ、イタリア、オランダなど
入 場 者	120,020 人 (昨年 110,559 人)
入 場 料	一般・大学生: 3,000 ウォン (240 円) (1 円 ≒ 0.08 ウォン) 小・中・高生: 1,000 ウォン (80 円)

報告：佐藤佳苗 [(社) 出版文化国際交流会 事務局]

## ブックフェア概況

### (1) 会場全体

ソウル中心部から南に位置する COEX(韓国総合展示場)、この 1 階で第 16 回ソウル国際ブックフェア (以下 SIBF) が今年も開催された。下の地下階は迷うほど広いショッピングセンターで、後述する大きな書店もここに入っている。

国際交流基金ソウル日本文化センター日本語・日本研究部長の十河俊輔氏、情報交流部文化情報チーム長のチョン・ジュリ氏、主任司書のシン・ギョンミン氏らとともに、日本ブースの設営を前日に終え、ユ・インチョン文化体育観光部長官らがスピーチ、テープカットした開会式で SIBF の幕が開いた。

全体を見渡すと、A と B しかないホールのうち、奥に位置する B ホールがまるまる児童書専門となっていて、この SIBF が児童書中心、と一部で言われているのもうなずけた。来場者への販

売が主なこのブックフェアで、その B ホール児童書館では本だけでなく、子供用のおもちゃや教育用グッズなど、本以外の物もかなり売られているのが目についた。これは最近の傾向だそう。入場者もベビーカーを引いたお母さんたちが目立つ。幼稚園児も引率されて何グループも訪れ、いろいろなグッズをおみやげにもらっていた。

もうひとつの A ホールが一般出版社と外国からの出展社ブースで、最初はフランクフルトと比べその小規模さに「え、これだけ？」とびっくりしたが、1 日やせいぜい 2 日しか来られない来場者に見てみたら、これくらいの規模のほうが個々のブースをじっくりと見て回れてちょうどいい気がしてきた。

出展社数は 596 社と昨年より減って見えるが、日本年だった昨年は日本から多くの出展があったため 885 社という特別多い数字になったのであって、今年は例年の数字に戻った。参加国、入場者数はともに昨年より増えている。

韓国の出版社ブースはどこも 2 割～5 割引きくらいで図書の販売をしている。2000 ウォン (160 円) や 3000 ウォン (240 円) 均一のパゴンセールなどもあり、大勢の人がたかっていた。本会理事で、出版ジャーナリスト、韓国出版事情のスペシャリストである館野哲氏によると、今年も韓国出版界内部の諸事情からか、韓国の主な出版社が軒並み参加していないとのことだ。しかし、それでも大勢の来場者が本を求めて毎日つめかけた。

入口からすぐの目立つ場所には、韓国基金と韓国文学翻訳院が立派なブースを構え、基金は主に伝統的な韓国を紹介する写真集を、翻訳院は各国語に翻訳された文学作品を展示、それぞれ充実した配布物とともに宣伝に努めていた。

電子ブック出版社のコーナーも通路一列分あったが、この分野は SIBF とはまた別に見本市が設けられているため、SIBF に出展する社は 5 社のみで以前よりかなり減っているとのことだ。

ゴン・ジヨン、ウン・ヒギョン、ソン・ソクゼ、チョン・ミョンガン、グウン・ビヨンら韓国人気作家各氏が訪れ、講演などを行い多くの人を集めていた。また韓国やヨーロッパの出版社による、海外への販売やデザイントレンドについてなど、プロ向けのセミナーも各種用意された。

## (2) 特別展示

特別展示としては、「本を通してみる韓国 100 年の歴史」、「イラストレーターの壁」、

ドイツブックアート財団が行っている造本装丁コンクールの 2003 年から 2009 年までの受賞作を展示した「世界で最も美しい本」、フランスのベスト 50 やボローニャ・ブックフェアのラガッツィ賞受賞作などを含む「世界の絵本展」、韓国では特別な動物である寅を今年の干支にちなんで特集した「寅をテーマにした絵本コーナー」などがあり、中でも特に人気を集めていたのが「イラストレーターの壁」だった。大勢のイラストレーターによるポスターくらいの大きさの作品をずらりと壁一面に貼り付けてあったものだが、どれもが思わず欲しくなってしまうような魅力的なものばかりで、いつも黒山の人だかりで写真も盛んに撮られていた。

「本を通してみる韓国 100 年の歴史」では、今年でちょうど 100 年となる日本による韓国併合・植民地時代と安重根 (アン・ジュンゲン) の愛国的行為、60 年となる朝鮮戦争、50 年となる 4.19 革命、30 年となる 5.18 民主化運動などを題材とした本が展示され、これを機にあらためて韓国

の現代史 100 年を振り返る企画だった。

また特別展ではないが、韓国の学術書協会ブースで展示されていた『親日人名事典』を紹介しておく。民族問題研究所発行、全 3 巻で 30 万ウォン (24000 円)、かなりのボリュームだ。パク前大統領も含む、1905 年～ 1945 年の間に日本に協力した「非難されるべき人々」4400 名弱のリストだという。親日とは日本への協力者、ということでももちろん悪い意味だそう。戦後 60 年以上経ても、このような本の編纂作業が現在も営々と行われ、発行・販売されているということ、様々な意見はあろうが我々は知っておかねばならないと思う。そこのブースにも、安重根の大きな写真が飾られていた。韓国では伊藤博文を殺害した国民的英雄とのことだ。豊臣秀吉も伊藤博文も、日本人は一般的に韓国側から見た視点についてほとんど知らないが、情報としてきちんと知っておかないと、韓国の人と接するときに困る。韓国には多くの日本人が日々訪れているし、逆に日本を訪れる外国人数でも現在韓国からが一番と聞いている。興味を持った人だけが自分で調べればよいことではなく、もっと広く多くの日本人が知識として知っていないと、問題なのではないか。

### (3) テーマ国フランス

初回の中国、昨年の日本に次いで、3 回目となる今回のテーマ国設定はフランス。黒の壁に囲まれた 416㎡のブースをしつらえ、100 ほどの出版社が出品し(直接参加は 23 社)、広い棚スペースに約 1600 冊の本を展示していた。雑誌も含めどの分野もまんべんなく紹介されているが、美術やデザインなど視覚に訴えるものがやはり目立つ。商談用のテーブル・椅子もあちこち並べられ、全体的にゆったりとしたつくりだ。ここでも図書の一部販売を行っていたが、展示のみのエリアと購入可能なエリアでは、やはり購入可能なほうがいつもずっとにぎわっていた。ベストセラーのトップとなり韓国でかなりの人気となっているフランスの作家、『蟻』シリーズで有名なベルナール・ヴェルベール氏の最近作『パラダイス』用に特別のブース看板も仕立てられ、氏は開会式にも参列、その後たくさんの方が押し寄せた講演・サイン会も催し、今回 SIBF を訪れるフランス作家たちの写真が大きく飾られているブース壁面前でも、常に来場者がヴェルベール氏の写真の前で記念撮影するなど、氏は今回 SIBF のナンバーワン人気だった。他にも、『永遠の七日間』などのマルク・レヴィ、『タラ・ダンカン』シリーズのソフィー・オドゥワン＝マミコニアン、マルティン・パージュ、クリスティン・ジョルディなどの作家各氏が参加し、講演やサイン会を行っていた。しかし人目をひく文化関係の展示やパフォーマンスなどは特になく、あくまで図書に徹して、その分全体としては多少地味な印象だった。

### (4) 外国ブース

その他外国出展者では、広いブースを出していたのはサウジアラビア。コーランをはじめアラビア語の本がほとんどで来場者にはとっつきにくかったようだが、逆にそれが独特の荘厳な雰囲気を出していた。日本と同じ広さが中国と台湾。台湾は立派なブースをしつらえている。しかし、ともに展示図書は少なく、パンフレット類もなし、アテンダントも台湾が一人、中国はカ

ウンターもなく、係の人さえいたのかどうかという様子に、まわりの韓国ブースや日本ブースと比べて、やる気のなさを感じてしまった。実際、訪れる人の数も隣の我々日本ブースと比べて圧倒的に少なく、中国などはほとんど人が寄り付いていなかった。逆にアメリカ大使館のブースはオバマ大統領の等身大看板などで派手に飾り、クイズなどで来場者サービスに努め、いつも人目をひいていた。イラン、スイスなどは児童書専門機関が出展し、韓国をはじめ外国から自国語に訳された絵本などを展示し、多くの人が立ち寄っていた。

#### (5) 日本ブース

テーマ国として大きくブースを設け日本をアピールした昨年と異なり、36㎡という一昨年の状態にまた戻って迎えた今年の日本ブース。国際交流基金と PACE が共同で設置・運営した。日本から送った 426 冊の図書と、国際交流基金ソウル日本文化センターが現地で選んだハングルの本 160 冊で構成。韓国ならではだったのが、日本で出版されている韓国についての本、国際交流基金出版翻訳助成を受けて韓国語に翻訳された本の原書、国際交流基金の季刊誌 Japanese Book News に掲載されているもの以外の日本文学、というジャンルだった。韓国併合から 100 年ということも意識し、その時代の歴史、両国関係などをテーマにした本も日韓双方で揃えた。日本語をそのまま読める人が多い韓国ということで、英文の本は少なめだったが、伝統文化やデザインなど、写真を多用し日本を紹介する本の数々は、ソウルでも来場者に変大好評で、英文図書は販売不可能だったのだが購入希望の声も多かった。

アテンダントは日本語を流暢に操るチョン・ビョンソンさんとカン・ジヨンさんで、通訳としてブースで大活躍をしていただいた。またお二人には韓国のことをいろいろと教えてもらって大変助かったし、個人的にも有意義な出会いとなった。その他にも前出の館野氏、PACE の OB で韓国通の落合氏、PACE の梶原、私がブースに詰め、来場者からのさまざまな問い合わせに応じた。

5 日間、大勢の来場者が日本ブースを訪れた。2 つしかない会場入口のうちのひとつからすぐ近くでテーマ国の向かい側という場所の良さもあり、正確な数はわからないが、来場者の結構な割合が立ち寄ったのではないと思う。実際、日本ブースはいつも人だかりで、テーマ国のフランスと並び、外国からのブース中では他とは比較にならぬほど絶えず人を集めていた。

日本ブースの来場者は圧倒的に若い女性が多い。日本のドラマや音楽のファン、小説ファンなど、韓国側でも日本ファンの多くは女性らしい。第二外国語として日本語を習っている中学生や高校生も目立つ。男性で多いのは年配の方と、同じく日本語を習っている学生だ。60 代以上と見られる年配の男性は、たいてい一人で訪れ、じっくり時間をかけて見ている。80 歳を越える方々が中心の「日本語世代」はもうあまり外出をしなくなっているだろうから、今訪れているのは子供時代に学ばされたのを少し覚えているとか、戦後勉強した方だ。印象的だったのは、日本からの写真集をすべて片っ端から 1 ページずつめくっては食い入るようにながめ、お昼をはさんで午前と午後と長時間にわたり訪れてくださった年配の男性だ。他の本もいろいろと物色された後、分厚い国語辞典と漢和辞典、写真集を購入されていった。声をおかけしたら、79 歳で、昔習わされた日本語はどんどん忘れてしまってもはやうまく話せないが、今日買ったこの辞書で今一度勉強したいのだ、とおっしゃっていた。もう辞書の細かな字を見るのも大変だろうに、その意欲

と興味には頭が下がる思いだった。一方で、同年代の女性はほとんど見かけなかった。日本ブースでだけ見かけないのではなく、全体的に50代以上の女性はあまり来場していないのが気になった。

フランクフルトでアテンダントをした時と比べ、カウンターで来場者から話しかけられることが少ないな、と最初感じていたが、こちらから日本語で話しかけると、たいてい日本語で答えが返ってきて、会話が始まった。韓国では外見だけで日本人かどうか区別がつかないからわざわざ声をかけないのだろうし、ヨーロッパの人に比べれば韓国人はそもそもあまり自分からは話しかけないのかもしれない。そんな違いに気付いてからは、わざと日本語ばかり使うようにした。その結果、椅子に座り込んで「どうすれば漢字を楽におぼえられるのか、効率的な漢字学習の方法を教えてください」と、40分も話しこんでいった人もいた。

ブースでのアンケートは150人分用意され、やはり韓国らしい結果が出た。関心の高いジャンルは他国で多い文化、マンガ・アニメ、芸術をおさえて小説が66人でトップ。歴史も23人。回答者の年代も10～30代だけで122人とかなりの割合。通りがかりに立ち寄った人32人に対し、日本に関心があるから、が109人と圧倒的。意見としては、まとめると「さらにもっといろいろなジャンルの本を」「ハンゲルで本の説明文を」「値段がわかりにくかった」「人気がある証拠だろうが、ブースに来る人が多すぎ」「もっと日本の出版社に出展してほしい」「日本が身近に感じられた。もっとこういう機会を!」「基金としてもっと何かしてほしい」などだった。次回改善できるところはしていきたい。

日本からは、本会が取りまとめをさせていただいたCMC インターナショナル、日本聖書協会、トーハン、文藝春秋、ポプラ、ホビージャパン、一万年堂出版の各社他、サカイエージェンシー、ダイヤモンド社が出展し、現地関係者とのミーティングに忙しくされていた。

## (6) 日本ブース図書の販売

今年も現地の書店、教保文庫が販売コーナーにたくさんの日本語図書を揃え、販売を行った。最初は、PACE が持ってきて展示している本も販売すると聞き、売ってしまったらその後の展示はどうするのかと思ったが、売れたらまた教保文庫が同じあるいは同ジャンルの本をすぐに在庫から出して展示したので、結果的に困ることはなかった。売れた本はフェア終了後にまた補充され、出展図書は最終的にすべて予定通り各所へ寄贈されることとなっている。出展図書のうち、児童書と手芸・料理・ファッション・ポップカルチャー分野の図書はほとんどが購入されていた。この分野はさらに種類と量を用意すれば確実にもっと売れると思われる。文学、ノンフィクションも売れている。販売可能な展示図書392冊のうち161冊が、教保文庫の在庫からは492冊が売れた。「売れ筋」の展示に力を入れれば販売数はもちろん伸びるが、我々の目的は販売ではなく、多種多様な日本の図書を外国で紹介していくことなので、それ以外の分野の本も当然のことながら多数展示して、この数字となった。

私は今回、これが販売を行える図書展というものかと感動しながら見ていた。現地書店側の流通やコストの点から、1、2の例外を除き世界のどの図書展でも展示の日本図書販売は難しいらしく、まだ実現していないのが現状で、それゆえ各図書展では、来場者からの問い合わせや希望

ナンバーワンはいつも「展示図書を買いたい」というものだからだ。来場者のその本が欲しい、という希望をかなえられ、しかも注文受け付けではなくてすぐに渡せ、その日持ち帰って読めるという、他の図書展を考えたら夢のような状況がここでは実現している。これも、両国の地理的近さ、そして日本の本や文化に対するありがたいほどの興味・需要から、すでに日常的に日本の本が受け入れられているがゆえだ。

## 日本書人気

### (1) 翻訳タイトル数不均衡状態

館野氏執筆の記事『出版ニュース 2010年4月号』によると、2009年において日本語から韓国語に翻訳された文学書の点数は886点で、英語圏のアメリカ・イギリス、そしてフランスからの数を押さえて第一位であり、翻訳文学の36.5%を占めるそうだ。それに対して日本語に訳された韓国文学は10点に過ぎず、886対10という大きな不均衡状態となっているという。

日本は欧米主要言語への翻訳に関しては、従来よりずっと輸入超過状態にあり、なんとか日本書の翻訳を増やせないかと日々苦労している。その意味でも、関係者にとって韓国でこんなにも日本の本が、それもコミックだけでなく文学が、受け入れられているということは信じられないくらい誠に有難い状況なのだ。

そしてそれを今回日本ブースにて、実感することができた。諸外国の図書展、特に日本の存在感が小さい国においては、そもそも日本語を読める人が少なく、「日本語の字だけの本はみな読めないのだから、展示図書のうち日本語の文学はわずかでいい、ビジュアル的なものを多く送って。」と言われる所も多いというのに、韓国では日本語オリジナルの小説を多数展示して、それを実際多くの来場者が読んだり購入していったりするのだから、本当にすごいと思う。

### (2) 書店での日本書事情

今回会場地下にある書店 Bandi & Luni's Bookstore を訪れ、また会場で日本書販売を担当した教保文庫（江南店で普段は勤務）のナー・ジョーヒュンさんにもお話を伺った。その2店の傾向をまとめると、外国語図書全体のうち30%くらいが日本語の本、買い求める客層は韓国人がほとんど、日本語図書の売り上げは店全体の2～3%ほどになると思われる、売れ筋は小説、雑誌、マンガ。年配者は政治分野などを買っていく。日本の作家で一番の人気は江國香織。そして東野圭吾、吉田修一などだそうだ。村上春樹、よしもとぼななももちろんだが、その前に来ないところが諸外国と異なる韓国の特徴か。Bandi & Luni's Bookstore でのベストセラーコーナーにも、彼らの名前が見えた。雑誌はファッションやインテリアものがよく購入されるそう。コミックは日本書コーナーに日本語オリジナルで、普通のコミックコーナーにそのハングル翻訳版が、ともにずらりと並んでいて、値段は一冊1100ウォン(88円)程度日本語版の方が高い。それぞれの購入層を聞くと、翻訳版を読み、興味を持って日本語を習い始め、日本語で少し読めるようになったら勉強のためにも日本語版の方を買う人が多いようだ、とのこと。また最新刊がオリジ

ナルで出ると、翻訳版の発行を待ちきれず、早く読みたいので日本語版を買ったりするそうだ。

外国で、日系書店ではなく現地の普通の書店において、日本の図書の翻訳書はもちろん、こんなに大量に日本語オリジナル本が売られ、ベストセラーリストに何人もの日本人作家の名前があるのを見て、驚きと感激をおぼえずにはいられなかった。

### (3) 韓国での日本語学習事情

ソウル日本文化センター日本語・日本研究部長の十河氏に、韓国での日本語学習事情についてお話を伺った。韓国での日本語をはじめとする外国語教育への熱の入れようには驚く。まず英語は小学3年からずっと必修。そして日本語だが、クラブ活動などですでに小学校で教えているところが300校近くある。中学では教員数から推定すると、PCや自国の古典・漢字学習などと並ぶ必修選択科目のうちのひとつとして日本語を選択する生徒が約10%、選択外国語の中ではトップ。高校では必修第二外国語として、6つある言語のうち履修者32%で日本語がトップ。いずれも中国語が非常に勢いを増しつつあるが、現時点ではまだ日本語を選ぶ人が最多ということである。

このようにまだ若いうちに大勢が学校で日本語を習い、日本になじみを持つ人が多いことが日本書人気の背景にあるのだろうと思っていたら、十河氏は、「それももちろんだろうが、しかし日本語に関しては、義務で学ばされる学校教育よりは、各個人の興味のほうがよほど、実際に普及の大きな推進力となっているのではないか」とおっしゃっていた。日本のドラマや歌手を皆インターネットやCATVで見ている、日本のアイドルグループや俳優は女性に非常に人気があるし、男性も含めてアニメやコミックもしかり。「これがいい、好き」と感じたら、その背景ももっと知りたいし、オリジナルのまま理解したいと思うようになる、と。学校でも男子は将来を考えて、中国語を選ぶ割合が比較的高いそうだが、日本語は女子に人気。日本のドラマなど何かに触れて、それが気に入ったから言葉も習ってみる、という自分の感覚を優先した選択をする傾向が女子は強いらしい。今回アテンダントのお二人も、日本語を習い始めたきっかけは日本の歌手やコミックだったという。これだけ日本の小説が出回っているのなら、「日本の小説（翻訳版）を読んで興味を持ったから、日本語を習い始めた」という層もそのうちきっと出てくると期待したい。

また両国の言語が互いに他の言語よりは学びやすい構造ということもあってか、韓国人の日本語学習者のレベルは非常に高いそうだ。日本語能力試験の一級保持者の割合が多い、ソウル日本文化センターで実施している日本語授業も一級取得者のみ対象、とこれもまた他の外国と比べて独特だ。

### おわりに

韓国へ行くのも、フランクフルト・ブックフェア以外の図書展を見ても初めてだった私。どんな様子なのか、緊張とともに興味津々だったが、すっかり感激して帰ってきた。人によって見方は色々だろうが、PACEの一員として、海外において日本の図書や文化を紹介、広めたいという思いで毎日仕事をしている私としては、我々が常日頃から理想としている「日本の本や文化が外国で十分紹介され、受け入れられる」という状態が、地理的、歴史的、言語的その他様々な

要因、そして許し難い過去も経ているからこそだろうが、韓国ではすでにかなり実現していることに、感慨深い思いを抱くことの連続だった。もちろん、韓国でのこの状態が今後どう変わっていくかは、日本が発信する魅力と我々日本人の態度にかかっていると思う。

文中にお名前を挙げた皆様、そして関係者各位の多大なるご協力に、今回も心よりのお礼を申し上げます。

